

# 『ペイフォワード (Pay Forward) の 発想で想いを伝える』



独立行政法人農林漁業信用基金

副理事長 北 英敏

私は、これまで農林漁業ビジネスとは縁遠い世界で過ごしてきましたが、基金でこの世界に接する機会を得て、はじめて、この世界の奥深さを垣間見ることができました。この世界についてのこれまでの自分の理解の浅さを反省するとともに、大きな気づきを得ることができたことに感謝しています。素人の浅薄な気づきではありますが、少しお話しさせていただきます。

農林漁業に対する私の当初のイメージは、食糧生産を担う重要な産業という漠としたイメージでしたが、この場所でいくつかの気づきを得ることができました。例えば、農林漁業という産業は、①公共性の高い多面的な役割（環境保全、沿岸警備、治山など）を担っており、単純にビジネスとしての採算だけで判断できない。②超長期的な観点が必要であり、特に、林業においては、30年、50年という単位で（世代を超えて）ビジネスサイクルが動く。③地域性（生活・気候・環境）と密接にリンクしており、その地域だけの視点ではなく、地域を超えた横の連携が必要になるなどの気づきです。

これらの気づきの共通点は、農林漁業という産業は、会社単位のビジネスを基本とした一般の経済理論が通用しづらく、地理的・時間的にも大きな視点から利他的な発想が必要な産業だということです。これは、現代における会社という組織が、短期の利益至上主義を求め、その結果、環境問題、貧富の問題などを生み、また、精神的な豊かさを失ってしまったことと正反対の方向性でもあります。

「ペイフォワード」という言葉があります。自分たちが他人から受けた善意を、善意を与えてくれた当人にではなく、他の誰か（その先の人）に渡すことで、自分が受けた善意をその先につないでいくということです。日本語では、「恩返し」ではなく「恩送り」とでも訳すのでしょうか？わかりやすい例でいえば、林業において、先人たちが30年前に植樹してくれた材を、その先の世代である我々が伐採して活用し、また、我々が植樹したものを我々の子や孫が切るという仕組みです。

2000年に公開された「ペイフォワード」という

映画があったのを覚えておられるでしょうか？ある少年が、「自分が受けた思いやりを別の相手3人に返す」という仕組みで社会を変えようと試みるという映画でしたが、自分さえよければよいという当時の自己中心的な世相の中で、一服の清涼剤のように感じられたことを思い出します。

短期の利益至上主義を反省し、改めて、与えることの重要性を理解し、地域社会や環境に貢献することが会社や社会のレジリエンスにつながり、同時に精神的な豊かさを取り戻すことができるという「ペイフォワード」的な発想が今改めて注目を浴びています。

実は、農林漁業という産業こそ、「ペイフォワード」的な発想を地で行く、古くて新しいビジネスであり、時代の先端を行くビジネスとして、若い人達も農林漁業に注目し始めています。私も、自分たちの世代・地域だけの損得ばかりではなく、世代を超えた遠い子孫や周辺の地域のことまで視野に入れた高い視点でこそ成立する農林漁業という産業の先進性を改めてかみしめています。

時に厳しい環境や経済の波にもめげず、地域の食料供給を支え、豊かな自然を守るために努力し、新たな未来を切り開いてきた先人たち。現在われわれが立っていられるのも、そうした先人たちの恩のおかげであることを感謝しつつ、先人たちの知恵や地域の伝統の上に、スマート農業など、我々の世代ならではの新しいアイデアや技術を載せて、それを後進につないでいく。こうした現場の皆さんの試みこそが、「ペイフォワード」的な発想で農林漁業という産業を持続可能な方向に導こうとする試みであると思います。改めてこうした現場の皆さんの努力に敬意を表したいと思います。

基金は、現在の中期計画が終了する令和9年（2027年）に、基金の前身である「農業共済基金」が発足して75周年を迎えます。改めて、基金の先輩たちが残した想いの重みを感じつつ、基金の活動を通じてその想いを「ペイフォワード」することで、農林漁業に携わる皆さんの明るい未来にお役に立ち続けたいと思います。